

学にて教授を受け候事有之故、都合宜敷御座候、侍従長閣下より野拙任命につき同博士へ内話有之候時、喜んで御清致候等と嘶され候、先日錦地拜趨の節、閣下御高話の如く侍従長閣下、誠に御謹勅且つ御丁寧に被為渡、誠に高德の慕はれ候事に御座候

毎朝九時半出省、侍従長官房で事務習得、大臣官房調査課での仕事を挟みながら、宮殿右庁にて一日七〇〇枚の国書押捺の業務に勤しみ、午後三時に退省する。当時の宮内属の勤務実態を知る上でも興味深い記述である。そして同省で、幕末期に祖父多一郎愛語が渡りあったであろう「天下の英傑」、即ち明治の元勳たちに接する「光栄」を得た事を喜んでゐる。更に同書翰には、宮内省内での香川の立ち位置を窺い知れる興味深い記述がある。

野拙東海の野人、礼節を知らざる事多く候間、十分御叱正御訓示の程奉祈度、御序の節宜敷御鳳声奉祈候、日「高秩父」、野「崎来蔵」、両秘書官も何呉れとなく世話致具候は、畢竟閣下に報ひ奉候の致す所と、万附此事に御座候、是又御序に御座候、宜敷御一声奉祈候（任官の翌日小原「聆吉」主事拙者呼び留めて曰く、君の御相伴で三善もうまくやった……、尚語をついで、日高を用心せよ……、然し君はこはくないが、君の後楯がこはいから、そうひどくはあ

の就職斡旋や生活支援が、実は自らの政府内の情報網や水戸出身派閥の拡大、即ち香川自身の権力基盤の強化に繋がっていた、という側面があった事も看取する事ができよう。

四 内藤耻叟と「大日本史」編纂

幕末水戸藩の上級藩士、明治期には著名な歴史学者として活躍した内藤耻叟（一八二七—一九〇三、諱は正直、字は仲養、号は耻叟や碧海、弥太夫と称す）は、文政一〇年（一八二七）一〇月五日に水戸藩士美濃部茂政の次男として生まれ、弘化三年（一八四六）に水戸藩士内藤正輝の養子となった。会沢正志齋や藤田東湖に学び、幕末に弘道館教授、奥右筆頭取まで務めたが、門閥派と尊攘激派の双方から排斥され、明治元年に水戸を脱出、会津や仙台を転々とした後、「湯沢正直」と名を変えて山形県庁に勤めた。明治六年に許されて上京、東京府小石川区長、群馬県中学校長などを歴任し、明治一九年（一八八六）には東京帝国大学教授に就任している。⁴⁰

転変を極めた内藤の半生は、東京帝大非職後に著された晩年の回顧録「懺悔物語」（『日本之少年』第三卷第二三、二四号、明治二四年）と「悔慚録」（『太陽』第二卷第六、一二号、明治二九年）に詳しい。短気、辛辣といった欠点を指摘されながらも、幕末水戸藩の一、二を争う人材であった⁴¹、実に水戸人中屈指の人物なり、などと評されたが、自身は天狗党の乱後の水戸

るまい、…御一笑被下度候、毎日の事故、事務も多少の变化は御座候も、概略右之如き工合にて、誠にうれしく、実に難有く、頗る愉快に執務致し居候間、何卒御安心被下様奉祈候

「君（皞）は怖くないが、君の「後楯」（香川敬三）が怖いから、君の待遇はそうひどい事はあるまい」。小原聆吉の言葉からも、当時の香川が宮内省で如何に権勢を振るっていたかが窺い知れよう。この後、皞は香川の庇護の下、内大臣秘書官、東伏見宮附事務官などに転じ、順調に宦海を遊泳してゆく。

香川の保護を受けた皞だが、皞自身も香川を慕い、頼った。「香川家文書」には皞の書翰が七一通もあるが、そのほとんどが自らの日常生活や宮内省勤務、政官界の動向、異動や昇給の幹旋依頼などを綴ったものである。別の書翰で皞は、水戸出身の高等官は僅かに大蔵省に一人（西野元）いるのみであり、「実に慨嘆にたえざる次第」と述べており、中央政官界での水戸出身者の類勢とそ中で生きぬく事の難しさを自覚していた。それ故に皞は、父諸隨以来、手厚い支援を与えてくれていた香川に庇護を求めたのである。

一方で、皞は中央政官界の動向を、自らの見聞を中心に実に細かく香川に報告している³⁹。その情報が香川にとって必要不可欠なものであったか、香川の要請に応じたものであったか否かは不明だが、皞の姿勢からは、香川が行っていた旧藩関係者へ

藩の混乱をまとめられなかった事を「余が一生の不覚なり」と「悔慚」している。旧水戸藩の門閥派と尊攘激派の双方から排斥されながらも、自らの能力と独自の人脈で栄達をきわめた内藤耻叟の軌跡は、明治を生きた水戸人の中でも稀有な事例であったといえよう。

「香川家文書」は約二万五千点という膨大な史料群だが、そのうち旧藩関係者からの書翰を多数含む。しかし、それは尊攘激派の旧藩士からのものが殆どで、門閥派の藩士に関する史料は少ない。香川の有する旧藩ネットワークも、いわゆる改革派に偏ったものであったと言う事ができるだろう。

中間派（中奸正）とされる内藤耻叟の香川宛書翰も、僅かに四件のみである。明治三四～五年のものが中心で、旧藩以来、営々と編纂が続けられてきた「大日本史」を上木せず校訂のみに止めようとする動きに対し、危機感を表明している。

○明治三四年六月六日付、香川敬三宛内藤耻叟書翰（『香川家文書』一二七六七）

一書呈拜仕候、不順之気候、弥御壯健奉賀候、扱先日申上候日本史云々、老公（徳川昭武）え御上言被下候哉、如何之御模様や相伺申度候、何レ近日参上仕候、扱此写別紙ハ先年老公より 朝廷へ御申上二相成居候 御上表候也、これにて拝見仕候とも、今更御板売出しを先にして上木御控と申スハ御濟不被遊候事之様奉存候間、願クハ貴中

より 老公へ御申上之節、御指出被下度奉願候、尤写ハ小生より貴下へ指出候振ニ御申上ニても宜敷仕候、兎二角御上木御決定ニ而夫ニ御下知被為在候様仕度奉歎願候、此段早々申上候、以上

六月六日 内藤耻叟

香川公閣下

上木途切レ候事ハ是迄ハ永く無之、打続キ御取掛リ之事御座候、元より可然御義と奉存候

別申

明治四年ニ老公御上表も有之、猶又錦囊之詔書ヲも 常山へ御納ニ相成居リ、猶昨年之 御贈位も有之候、日本史を今御板ニ而ぶちながし候ハ実ニ水戸ニ臣なしと可申候、只小生一人ハ侃々正論可有を以於地下 両公え申上候心得御座候、水戸ハ尊 王之御家ニ候はずや、然るにかく迄なり下り候とハ、誠ニ慨嘆ニ不堪次第ニハ無之候哉、何卒く貴下御奮発、山口〔正定〕等とも御激励被下度、兼而山口ハ概略なる人物之由ニ承候上ハ必善言ニハ従ひ可申と奉存候、以上

○明治三四年六月一八日付、香川敬三宛内藤耻叟書翰（「香川家文書」一二七六七）

両三日御快晴輕暑之候之所、弥御壯健奉賀候、度々尊嚴ヲ

上表文と詔書がありながら実行しないのは水戸に臣なしと言うべき、水戸は尊王の御家ではないか、水戸藩士民の尊王の大義に関わる、と激しく批判し、香川に周旋を懇願している。

明治三四年末に脳卒中で倒れたためか（後述）、判読が困難な筆跡だが、他に同三五年五月八日付の香川宛書翰（「香川家文書」九〇九）もあり、「山口氏薨後」の「日本史上木」に關して、七五歳を迎えたこの老翁を憐れみ、どうか「御賛成」を、と請うている。別稿で指摘した通り、山口正定に代わり水戸徳川家評議員となった香川の尽力もあり、同年一二月一五日に「二志三表」の上木が水戸家家令の手塚任から編纂員の栗田勤に指示され、翌年二月二日の評議員会で「大日本史」の完成に向けた編纂継続が正式に決定された。

先の書翰で内藤は、自らを待罪人、嫌疑ありとし、外に同志もない、と述べているが、これは幕末期に、門閥派の側で戦い、また脱藩したため、旧藩関係者の中で孤立していた事を意味している（内藤は士族ではなく、平民として復籍していた）。内藤は、栗田寛など個別には水戸学者と交流があったものの、「大日本史」と「水戸藩史料」という、明治期における水戸徳川家の二大編纂事業に参画する事はなかった。明治日本を代表する学者の一人であり、「水戸藩史料」編纂の契機となった島田三郎著「開国始末」への激しい反論の書「開国起源安政紀事 附開国始末弁妄」を著したにも拘わらず、旧藩の歴史編纂事業の主流から外されていたのである（明治期の水戸徳川家

奉冒失敬候へ共、此比朝倉〔政通・常磐神社〕官司之密詰とて承り候所、常磐神社ニ御奉納相成居候 明治四年比之 御詔勅ニ汝昭武、光圀・斉昭之遺志を継キ修史之業を完セよとの御文御座候て、赤地之錦之御袋ニ入候品御座候由、内々承り申候、右ハ先日指上候写上表有之之為メ、この 御詔ヲ被下置候御事ト奉恐察候、右様之次第ハ定而御省中ニも御記録も可有之、山口〔正定〕氏とても承知ニ可有之所、然ルと御板位之失体ニて相済シ候而ハ決して不相済御義と可存候、右ハ水戸藩士民一同之尊王大義ニも相拘り可申義と相心得候間、何卒厚く御酌取之上、夫々御周旋被下度、山口氏ニも御相談奉願候、小生ハ元米待罪之身分ニ付嫌疑も有之事ニ候へ共、奉対 天朝並 義烈両公様、御神君誓而奉申上候事ニ御座候、此旨厚く御照諒可被下候、早々頓首々々謹言

六月十八日 内藤耻叟

香川敬三公台へ

度々煩尊慮候ハ如何ニ御座候へ共、外ニ同志之者も無之候ニ付、又々申上候、以上

明治三二年（一八九九）に「大日本史」編纂の中心であった栗田寛が死去すると、残された「二志三表」の短期間での速成を企図して水戸徳川家からの圧力が強まった事は別稿で指摘した。内藤は「大日本史」を上木せずに済まそうとする動きに対し、

家令長谷川清と内藤が犬猿の仲だったとの指摘もあり、その事も要因の一つだったと思われる。

大正く昭和戦前期の政治評論家・ジャーナリストの久木独石馬（鎮派の領袖である水戸藩士久木直次郎久敬の孫）は、同家に伝わる内藤の久木直次郎宛書翰を引用しながら、「水戸藩史料」の編纂事業やそれを主導する水戸家家令たちに抱いていた内藤の感慨に触れている。

明治二十四年（一八九一）の七月、彼〔内藤耻叟〕から久木久敬に与へたる書翰の中に、「当分水戸の事は、真実の事は頭はれ可申様無之候。姑く小生杯は姦物に陥る覚悟仕居候。何んといはれても、少しも痛くも痒くもなし」とあるのは、よく彼の胸中を語るものにして、つまり彼を以て姦物と見做して排斥してしまふ旧水戸藩邸の史家の史論の如きは、一笑に付して可なりといふわけである。明治に入りての旧水戸藩邸の重立ちたる家令執事達が、彼の旧藩公に見ゆるを喜ばずして彼を敬遠し、彼も亦遂に小梅邸に行かなかつた事実があるが、明治時代に於て、水戸学の代表者が、猶姦物扱ひされるに到りて、私は、彼の心事に同情せざるを得ない。

実際内藤は、尊攘激派を「君徳を汚濁する罪人」「人妖」「乱賊の所業」と痛罵し、「万延元年桜田狼藉」「長岡ニ屯集スル兎徒ノ残衆」「筑波ノ兎徒」「澁村ノ賊」などと、激派の所業を否定的に論じていた。内藤の未完の著作で、澁沢栄一編著「徳川

慶喜公伝」でも参照された「水戸小史」でも、「後人察せず或ハ彼兇徒ノ言ヲ以テ信トス、不思ノ甚シキ也、史家多クハ一犬虚ヲ吠テ万犬実ヲ伝フル者、皆信ズベカラザル也」と、激派中心の史論への警鐘を鳴らしている。また明治三五年一月二二〇日付、香川敬三宛酒泉直書翰（「香川家文書」一一一六一）にも「贈位者之内、椋田・坂下之學ニ対而は、時事・日本新聞環は忽チ罵言ヲ撻申候、多くは耻叟等之門下之所為」とあり、同年の椋田・坂下両事件の關係者への贈位に関して痛烈に批判する新聞記事を「耻叟等之門下」の所為と指弾するなど、明治期においても激派と内藤とは實際に对立關係にあつたようだ。

しかしそうした中でも、「水戸藩史料」はさておき、旧藩以来の「大日本史」編纂事業に関しては、畏友栗田寛との關係もあり、完成を見ずに中座させようとする水戸家家令たちの動向を座視できなかつた。「大日本史」は、崇敬すべき二代藩主光圀以来、父祖たちが嘗々と編纂してきたものであり、江戸後期以来の藩内の党派対立を越え、旧藩の威信にかけても完成させねばならないと、内藤は認識していたのであろう。明治期に旧藩主家と疎遠になりながらも、旧藩自体には強い思いを有していた事を示唆する、興味深い書翰内容といえよう。

さて、内藤耻叟と姻戚關係にあり、交流も密であつた旧水戸藩郷士高瀬真卿の日記によれば、香川へ書翰を發してから約半年後、明治三四年の年末に内藤は「卒中症」（脳卒中）で倒れ（二月三〇日条）、翌年一月一日にその膨大な蔵書の「讓受」

や「買取方」を、高瀬は親交のあつた旧土佐藩士土方久元（元宮内大臣）に依頼している（死を予期した遺品整理か）。内藤は一時回復したものの、翌明治三六年六月六日に死去、谷中天王寺に葬られた（享年七七）。

葬儀に参列した旧水戸藩郷士野口勝一（茨城県議會議長、衆議院議員など。童謡詩人野口雨情の伯父）は、その日記に「耻叟水戸人、善く書を読み、徳川幕府の典故に通じ有名なり、耻叟、初め正奸の中間に立ち、中立党を為す、正奸共にこれを惡み、しばしば耻叟を苦しめる、慶応末年、禍変を恐れ奥羽に走る、幸い性命を全うし、東京に来る、老儒を以て世の称える所となる、議論最も主なるは頑硬心、すでにその非を知りて敢えて改めず、去る六日死す、年七十七、谷中天王寺墓地に葬す」（原漢文）と記した。水戸人らしい頑固さで、旧藩關係者、特に激派の藩士たちにおもねる事なく、幕末から明治を生きぬいた内藤耻叟の生涯を簡潔に表現した言辭といえよう。

香川が周旋した形跡は見えないが、死に際して内藤も正六位に叙された。その叙位奏請書には「夙ニ勤王ノ志篤ク王政維新ノ後、召サンテ山形県ニ出仕シ」とあり、旧水戸藩での功績については全く触れられず、専ら維新後の学生教導、学問上から外れながら、自らの能力を頼りに明治を生きぬいた内藤耻叟の生涯とその評価の一断面を、確かに表しているといえよう。

註

- (1) 皇學館大学史料編纂所編「香川敬三履歴史料」（皇學館大学史料編纂所、平成四年）、皇學館大学史料編纂所編「図録・香川敬三關係史料の世界」（皇學館大学出版部、平成二四年）、上野秀治「香川敬三と茨城」（「水戸史学」第七八・七九号、平成二五年）のほか、皇學館大学の紀要や史料編纂所報に掲載された上野氏の多数の先行研究、吉原康和「靖國神社と幕末維新の祭神たち」（吉川弘文館、平成二六年）、今泉宣子「明治日本のナイチンゲールたち」（扶桑社、平成二六年）などを参照。
- (2) 拙稿「香川敬三と明治の水戸藩士―武田金次郎の知られざる末期―」（「常陸大宮市史研究」第一号、平成三〇年）、同「水戸藩史料の編纂と徳川斉昭の贈位」（羽賀祥二編「近代日本の歴史意識」吉川弘文館、平成三〇年）、「香川敬三と近代茨城」（茨城県近代現代史研究」第三号、平成三一年）など
- (3) 前掲拙稿「香川敬三と明治の水戸藩士―武田金次郎らの知られざる末期―」
- (4) 坂井四郎兵衛編「天保明治水戸見聞実記」（知新堂、明治二七年、二二二頁）
- (5) 「水戸藩史料」下編全（吉川弘文館、昭和四五年（復刻）、一一四二・八頁）、「茨城県立歴史館史料叢書二 内閣文庫蔵茨城県関係史料下」（平成二一年、一五四頁）、明治元年一月二日付「武田金次郎一手皇居御門御警衛人数差出ノ儀上申」（「明治元年 公文録」第一巻、国立公文書館蔵）、三村昌司「公議人の変遷について」（「東京未来大学研究紀要」第七巻、平成二六年、一七〇頁）
- (6) 大石忠良「武田金次郎」（近代文芸社、平成二三年）など

- (7) 増田于信は、文久二年（一八六二）年に水戸藩士雨宮于勝の子として生まれた。東京大学文学部和漢古典講習科を卒業し、明治七年（一八八四）に国学者本居豊顕の婿養子となるが、妻並子の死とともに同家を出て増田家の養子となった。「日本童謡の父」とされる本居長世の父としても知られる。明治四〇（大正一五年）（一九〇七）に宮内省御用掛として活動した（松浦良代「本居長世」国書刊行会、平成一七年、二二一―四頁）。
- (8) 渡辺刀水「増田于信の『野路村雨』」（伝記」第六巻第八号、昭和一四年八月、二七頁）
- (9) 武田（佐野）猛に関しては、上野秀治「香川敬三と『水戸歴世譚』」（皇學館大学史料編纂所報」第八〇号、昭和六〇年）、二月二七日付香川敬三宛武田猛書翰（「香川家文書」二九五〇）、「愛媛県警部兼同県属武田猛転任ノ件」（「明治一九年 官吏進退」巻二四）及び「退職検事武田猛特旨叙位ノ件」（「大正五年 叙位」巻二九、国立公文書館蔵）などに添付された履歴書を参照。
- (10) 後年だが、明治三五年（一九〇二）五月二〇日付香川敬三宛酒泉直書翰に「于生甥養子ニ差遣、其後猛儀ハ実家ヲ相統致、右養子ハ武田養育ニテ中学ハ本年卒業致」（「香川家文書」二六九六）とあり、実際に「酒泉金ノ二男」（直の甥）が佐野家の養子となり、武田家に扶養されていた事も確認できる。しかし酒泉は、甥は東京で勉学に励み、外交關係の職に就きたいと希望しているが、武田も資力に乏しいため、香川に「尊宅ニテ御召使」としてくれないかと依頼している。
- (11) 「香川家文書」二九九四（明治一七年九月二七日）、二九九五（同年九月一日）、六〇九五（同年五月二日）、六〇九六（六月二八

- (12) 「香川家文書」 一一九五四
- (13) 「香川家文書」 五七三四
- (14) 前掲「香川家文書」 五七三四
- (15) 「香川家文書」 三一八〇
- (16) 明治三六年五月一七日付香川敬三宛高橋諸隨書翰(「香川家文書」 三一八〇、三一八一—)、同一八日付内閣書記官宛香川敬三書翰(大久保鉄太郎「近世名士書翰集」 服部文實堂、昭和四年)、同一八日付多田好問宛香川敬三書翰(個人蔵)
- (17) 「明治三十六年 叙位裁可書」 卷五(国立公文書館蔵)
- (18) 明治三六年五月一八日付、香川敬三宛海後淳書翰(「香川家文書」 二一九〇)
- (19) 「東京朝日新聞」 明治三六年五月二〇日付
- (20) 明治三六年五月二日付、香川敬三宛高橋諸隨書翰(「香川家文書」 三二七九)
- (21) 小宮山南梁「南梁年録」 卷八一(茨城県史料 幕末編Ⅲ) 平成五年、三八四頁)に、那珂湊合戦の降参人として「久米謙吉へ御預降参人共名前書」の項に「海野剛蔵」(次の記載が「米崎 海後弁(捨)三」とある。
- (22) 前掲「海後礎磯之介宗親遺録」
- (23) 戦後、歿後六〇年にあたる昭和三八年にまとめられた「海後礎磯之介宗親遺録」に、遺稿「潜居中覚書」ほか、「菊池宗親談記」(高橋諸隨筆記)、「桜田義士海後礎磯之介潜伏覚記」(高野清則筆記)が収録されている。
- (24) 名越時孝「車修館日記」 明治二六年三月七日、二八年四月二

三三四

- (36) 同祭典をめぐる水戸志士顕彰運動に関しては、高田祐介「維新の記憶と「勤王志士」の創出—田中光頭の顕彰活動を中心に—」(「ヒストリア」 第二〇四号、平成一九年)を参照
- (37) 前掲、明治四三年三月二九日付、香川敬三宛高橋峰書翰
- (38) 二月二七日付、香川敬三宛高橋峰書翰(「香川家文書」 三三三五)
- (39) 「香川家文書」 三三四三、三三三七など
- (40) 内藤耻叟の履歴に関しては、「内藤耻叟特旨叙位ノ件」(明治三十六年 叙位裁可書) 卷七、国立公文書館蔵)、「山形県史」 資料編一・明治初期上(山形県、昭和三五年、六〇四頁)、秋元信英「幕末・明治初期の内藤耻叟」(國學院女子短期大学紀要) 第三卷、昭和六〇年、久野勝弥「内藤耻叟」(「水戸の先人たち」 水戸市教育委員会、平成二二年)などを参照
- (41) 久木独石馬「操觚界の先輩後輩」(三十九)、「東洋文化」 第六七号、昭和五年、九九頁
- (42) 「野口勝一日記」 明治一八年四月五日条(「北茨城市史」 別巻五、平成三年、一四八頁)
- (43) 「悔慚録」(茨城県立歴史館史料叢書一六 否齋録・悔慚録・明志録) 平成二五年、二一四頁)。茨城県立歴史館には、酒泉直筆と思われる「悔慚録」の筆写本があるが、同書は「太陽」掲載の「悔慚録」一〜四の写本であり、幕末維新期に会津から仙台、山形へと逃れ、東京で再起する様子に触れた五が欠けている。
- (44) 前掲「香川敬三と近代茨城」
- (45) 久木独石馬「水戸藩史の本筋横筋—水戸史漫談」(二三)——(「東

七日、一二二〇日条(名越家資料) 一九一、茨城県立歴史館蔵)

- (25) 蛙堂「桜田要駁談」(「東京朝日新聞」 明治三一年一月一四日付)、「海後礎磯之介君口話」(高瀬真卿「故老実歴水戸史談」 中外図書局、明治三八年)、「春雪偉談 海後氏実歴話」(「水戸藩関係文書」 第一、日本史籍協会、大正五年) など
- (26) 前掲「桜田要駁談」
- (27) 拙稿「海後礎磯之介、明治に死す(上)」(「広報 常陸大宮」 第一八四号、令和二年一月)
- (28) 高橋諸隨墓表(水戸市・常盤共有墓地)
- (29) 「明治七年 公文録」 第三〇四卷(国立公文書館所蔵)
- (30) 前掲、高橋諸隨墓表。「いはらき」 明治二四年八月二五日、同日、同二九年二月一六日付などには、同郡をめぐる郡長排斥運動の記事がある。
- (31) 前掲、上野氏論文及び拙稿参照。歩兵第二連隊の転営は、明治三九年二月一六日付、香川敬三宛高橋諸隨書翰(「香川家文書」 五九八四)。また大坂四天王寺に建つ「亡義父兄遺骨療養地」の修繕にも、香川の助力を仰いでいる(明治三六年四月一〇日付、香川宛高橋書翰、「香川家文書」 三二七六)。
- (32) 明治四一年二月七日付、香川敬三宛武田猛書翰(「香川家文書」 六〇八四)
- (33) 高橋峰「倫敦より東京へ」(三友堂書店、大正九年)
- (34) 武石光三郎編「茨城県紳士録 第一版」(昭和一〇年、有備会出版部、六二七頁)
- (35) 明治四三年三月二九日付、香川敬三宛高橋峰書翰(「香川家文書」

洋文化」 第二〇二号、昭和七年、五五頁)

- (46) 久木独石馬「学者にして智者なりし内藤耻叟—水戸藩の人物—」(「大日」 第三九号、昭和七年、三八頁)
- (47) 前掲「悔慚録」 一八八、二〇六〜七頁
- (48) 内藤耻叟「水戸小史」(岡次福里筆写本、茨城県立歴史館蔵)。同著については、瀬谷義彦「水戸小史」の立場(同「茨城地方史の断面」 茨城新聞社、平成一六年)を参照。
- (49) 「高瀬真卿日記」 明治三四年二月三〇日、同三五年一月一一、一四日条(「高瀬真卿日記」 三、淑徳大学アーカイブズ叢書、平成二六年。明治三一年一〇月、高瀬の長男紹卿と、内藤の娘布久子が結婚している(翌年離婚)。また内藤の蔵書は、最後に古事類苑の編纂所が買い取ったという(斎藤兼蔵述「先代琳瑯閣とその周囲」、反町茂雄編「紙魚の昔がたり」 上巻、訪書会、昭和九年、二〇頁)。
- (50) 「野口勝一日記」 明治三六年六月九日条(「北茨城市史」 別巻八、平成六年、二七三頁)
- (51) 前掲「内藤耻叟特旨叙位ノ件」

【参考】 主な旧水戸藩士の履歴

- 香川敬三「一八三九—一九二五」
茨城郡下伊勢島村の郷土蓮田孝定の子三男。旧名蓮田了介。鯉沼伊織号は東州。藤田東湖や加倉井砂山の日新塾に学び、幕末に上京して岩倉具視の知遇を得る。岩倉使節団にも参加。明治期には、主に皇后官大夫として宮内省に奉職し、土佐出身の宮相土方元や田中光